

現在社会におけるサーフィン文化の位置づけと潜在能力

——サーフィン文化の研究の論理的なフレームワークとその可能性——

コノネンコ・アレクセイ

序 論

サーフィンは、一般的に優先順位の低い海の遊び、季節的なスポーツと理解されている。私も、6年前にサーフィンを始めたときに、他の海水浴の遊びの一種にしか過ぎないとしか考えなかった。しかし、そのときから驚いたのは、サーファーの人数とサーフィンの地理的な分布であった。仙台エリアでは、おそらく数千人のサーファーがおり、日本のサーファー人口は2百万人を超えていると言われている。サーフィンを行っている人の年齢、性別、職業がさまざま、海に囲まれている日本のどこの海岸に行っても必ずサーファーがいる。日本だけではなく、ハワイ、カリフォルニア、オーストラリアをはじめとして、世界中に海岸線のある国にどこでも波に乗る人がいる。サーフィンをやっている人間の生活スタイル、経済的な能力、社会的な立場はそれぞれだが、サーフィンを通じて大きな共通点をもっている。

サーフィンの中心となっているのは自然な波に乗る行為である。つまり、サーフィンをしたい人は、不安定、不定期的、無感情な自然を相手にしなければならない。そのために自然、自己能力、道具について様々な知識を身につけて、サーフィンという行為を自分の生活スタイルに取り入れなければならない。つまり、サーフィンを楽しむ人たちの共通点は、その技術レベルとかかわり具合に関係なく、自分の生活にいかに関わりを取り入れていくかという、サーファーとしての生活スタイルである。この生活スタイルは長い歴史を持ち、現在国境を越えて大きな集団に共有されている。

文化人類学は人の生活スタイルが成り立っている構成要素（行動、思想、信仰など）すべてを文化としてとらえている。様々な学問（経済学、心理学、社会学、政治学、宗教学など）は、この構成要素を別々のものとして研究しているが、文化人類学の研究は、全体的として社会の諸要素の相互作用とその結果としての変化に重点が置かれている。この視点から、長い歴史を持つ一つの行動、生活スタイル、文化としてサーフィンはどのように変化し、社会と個人のレベルでどのような役割をもっているか、人間の本質を様々な角度から理解するために重要な研究課題となる。

本論では、文化人類学のアプローチとして、文化の一部の点を問題とすることで他の文化構成要素との間の相互作用を探るという視点から、サーフィン文化を今後の研究対象としてどのよう

な角度から接近できるか、理論的なフレームワークとして考えることにした。

方 法

サーフィンを文化として意識するためにその歴史と行動自体を理解しなければならない。このために研究活動を二面に分けて、歴史、文化、状況について資料や文献から情報を集めると同時に、自身の経験を生かして参与観察方法によって実際体験を分析することにした。

研究過程のなかでいくつかの問題点があった。まず、サーフィン文化は多面的で、サーフィンとサーファーたちを対象として学術論文が社会学か歴史学の面に限られている。過去から現代へ展開し、変化しながら様々な形をとる統一文化としての研究はほとんどなく、逸話的なレベルのみで記述されている。この原因は、おそらく、サーフィンが非常に個人体験的な行動で、この経験を記録、分析するために感情的、主観的な表現を利用せざるを得ない。そのため、学術的な論文で求められている数量的なデータと客観的な視点の立場から批判に及ぶと思われる。

第二に、サーフィンについての文献は圧倒的にカリフォルニア、ハワイとオーストラリアに偏っている。ローカルのサブカルチャーの参与の中で必ず相違がある (Butts)。世界に広がったサーフィンはそれぞれの文化の中で存在し、ある共通点を持っているが、それぞれの現地文化背景の中でどのように発展しているか、文化人類学の視点から興味深い問題である。しかしながらハワイ、カリフォルニア、オーストラリアの次にサーフィンの歴史が長い日本では、日本のサーフィン文化の歴史と本質についての研究がほとんど見当たらなかった。

サーフィン文化を社会現象として理解するにはその文化と動機だけではなく、そもそもサーフィンという行動とは何であるかを理解するべきである。参与観察方法による今後の分析のためより深い理解の基礎を得られるとされている (Butts)。観察調査は6年間宮城県、仙台市を中心に南茨城県から北青森県の間に海岸線沿いのポイントで行われた。日本の外にインドネシアとオーストラリアのサーフィン経験は比較資料として参考にした。

はじめに参与観察を行うときにサーファーとの交流、行動参加、直接観察のほかに質問集方式で固定インタビュー方法を試みたが、以下の3つの困難が感じられた。

第一に、もちろん波のある海岸はサーファーについてデータを集めるために一番ふさわしい場所だが、サーファーは、海に入る目的で海に来ているので的確なデータを集めるための時間と場所を確保することが困難なため結果の主観性が疑われる。

第二に、ほとんどの日本人は、周囲からどういうふうに使われているか、どのように見られているか、といことをとても気にしているため初対面の外国人から正式インタビュー調査を申し込まれると正直な本音が出てこないと感じた。サーフィンについて記載するメディアが多く、回答はメディアのイメージ化に強く影響されていると思われる。

第三に、固定インタビュー、質問集によってサーフィンについて数量的なデータの採取可能だ

がサーフィン文化は多様性を持っているので、一定の質問ではそれを浅薄的に固定してしまうので、一部しか理解できないと思われる。正式なインタビュー、或いはアンケート形式の調査は、サーフィンの場合非常に困難で主観的であると指摘されている (Hull, 1976)。

以上の理由で情報を集めるときには、実際にサーフィンをしていた自分の経験と他のサーファーとのインフォーマルな交流を基本にした。相手の性、年齢、職業を問わずに、秩序だっていない対話を通じて距離が縮んだ時に話題を次のことに集中させた：

- ① 年齢、職業
- ② 海に入る頻度
- ③ サーフィン関連にかかる費用
- ④ いつからサーフィンを始めた
- ⑤ どうしてサーフィンを始めた
- ⑥ 自分にとってサーフィンはどんなこと、人生の中でどんな割合をしめている
- ⑦ サーフィンを通じてどんな経験をした、この経験によって自分の中で何かが変わったか
- ⑧ 海について、環境についてどう思うか

もちろんこの方法で得られた情報は非常に主観的だが、個人のレベルで文化の多様性と特質についてより深い理解が得られると考えられる。サーフィン文化を今後研究するために、その特質(経済的結果、社会的役割など)を評価できる方法が必要と考えられる。

サーフィン文化の由来

サーフィンはポリネシアン文化の一部である。波乗り行動は初めて記録されたのが英海軍のジェームス・クックが1778年にハワイを初めて訪ねたときであった。しかし、波乗りの起源はもっと昔にさかのぼる。発掘調査で発見されている最古サーフボードは300年前のものと判断されているが、ポリネシアの伝統、神話、宗教を総合的に考えると波に乗って楽しむ習慣は千年以前から始まったのではないかとされている (Finney and Huston, 1996)。南太平洋で欧米人の到来の前に波を木の板ですべる習慣があった証拠は沢山残っている。サーフィンは、おそらく数千年前からポリネシアンの若者の中で波の表面を寝た状態でボードの上ですべるという形で流行った。この形の波乗りは、おそらくポリネシアにきた人たちの海洋適応技術の一つであった。ハワイアンは波乗りの表現に41個の単語を使った(これはおそらく一部に過ぎない) (Finney and Huston, 1996)。それだけ会話の中で波乗りの経験を伝える必要があったということを示している。

サーフィンはハワイ諸島で生まれたと一般的に考えられているが、実はポリネシアン文化の中でとても広い範囲でなんらかの形で存在していた。この起源は、おそらく、ポリネシア人が島と島の間を移動したときに使ったカヌー、或いはボードでパドルするときに海洋のうねりを上手く

利用し、海岸に近づくと強い波に巻き込まれないために波の力を使って岸に上がる知恵から始まった (Finney and Huston, 1996)。古代ポリネシアンは海と共に生きて海について豊富な知識を持っていた。サーフィンはこの知識から生まれたといえる。しかし、サーフィンは文化的に重要な役割を持つに至ったのはハワイ島のみである (Kampion, 2003)。それは、おそらく、ハワイ島の地理的な特徴と通年に立ち上がる上質な波 (ハワイ諸島は火山島のため深いところから到達したうねりが溶岩の形成したリーフにぶつかって立ち上がり最高級の波を作り上げる) が、このスポーツがハワイで一番盛んになってきた裏づけとなった。ハワイは地球上に一番大きい水のタンクの真ん中に当たり、どんな方向の波にでもさらされているため、論理的、構造的にハワイ諸島がサーフィンのために存在しているともいえる。

サーフィンはポリネシアンにとって単なる遊びやスポーツではなかった。サーフィンは古代ハワイの信仰、言葉、祭り、愛情、民謡、物語に編み込まれていた。サーフィン関連行動は古代の複雑な社会構造と重なり合っていた。サーフィンを含めて部族長と一般人の行動は複雑なタブーによって制御されていた。しかし、サーフィンは上層の部族長のスポーツだけではなく一般人のスポーツでもあり、隔離された島生活の核心的な部分であった (Finney and Huston, 1996)。自然の中に生きるため自然から資源を奪わなければいけないのだが、自然の再生サイクルを壊さないため自然に感謝し、獲り過ぎないように注意するという意識はポリネシアン文化だけではなく、シベリアの少数民族、アメリカインディアン、オーストラリアのアボリジニーなど、直接に周りの環境から生きるための資源を獲る民族に広く普及している。この考え方は、儀式、継続している伝統、文化的なタブーなどとして現れている。ポリネシアンの文化のなかで人は自然と対立するのではなく、自然の一部であり、自然と精神的な関係を持っていると信じられていた。波に乗る、自然な波を楽しむことによって人は母なる海と一体になるという考え方からサーフィンが生まれてきた。サーフィンはハワイ文化の信仰に関連し、直接に崇拜儀式などの意味を持っていなかったが、生活のほかの様子と同じように神と靈魂を密接に取り込んでいた。ボードの制作から始まり、ボードの材料となる木を切り取る段階から必ず神に贈呈され、波がないときに波を呼び寄せる儀式が行われるなど、ハワイの恒例の祭りに大きな役割を果たし、少なくとも一つの石の神段はサーフィンにささげられていたのである (Finney and Houston, 1996, pp. 47-48)。初めての西洋人は、ハワイに来たときにサーフィンがハワイアンの中でとても大事な役割を当てられていたことに気づいた。当時の様子を目撃した西洋人の記録では、波のいい日に集落のすべての住民がすべての作業をやめて波乗りを楽しんでおり、性、年齢、社会層と関係なく皆が波乗りをしていた。ハワイアンの貴族はリーダーシップのステータスが部分的に体力とスタミナにかかっていたためサーフィンによって体調維持をしていた。

欧米人がハワイに到来したのは18世紀の末であった。ハワイ諸島に来た西洋人にとって、原住民の考え方は原始的であった。18世紀末において、産業革命によって大英帝国のモデルが文明の基準とみなされ、それ以外の文化はより低い発展段階で留まって、文明国の責任として文明化さ

せる必要があるという考え方は政治、経済、教育、科学、宗教など、あらゆる分野で流行っていた。西洋人の進入が始まって以来、持ち込んだ様々な病気によってハワイアン的人口は40万人から4万に減少してしまった。商人や、企業家が紹介した新しい商品と技術、新しい経済によってハワイアンの社会構造は揺らいできた。島に入り込んだキリスト教の宣教師は、まじめな生活から、気持ちを乱すとされたサーフィンとフラダンスを禁じた。ハワイアンの文化は滅びる寸前の状態に追い込まれた。そのときに波を楽しむ人はほとんどいなくなった。しかし、サーフィンが消えた理由は実際の禁止令ではなく、西洋人がハワイアンの文化を壊したことによってサーフィンの精神的な場面がなくなり、ハワイアンがこの行動に興味を失ってきたということであった (Finney and Houston, 1996, 51-57)。初めての西洋人が到来した1778年とハワイ諸島がアメリカに併合される1898年までの間にハワイは社会的、経済的、政治的な独立を失って、人口の減少と共に現地文化は衰えた。ハワイの文化は信仰や、儀式的な規制を生活の基礎としていたが西洋人の持ち込んだ新しい構造によって神の力、儀式的な規制が疑われて原住民の信仰から乖離を起こし、社会的な安定、家族の基盤、社会構造を乱し生活のすべての面、農耕、漁労などに影響を与えた。その中でサーフィンも例外ではなかった。サーフィン文化はほとんど衰退したが、レクリエーションのサーフィンが生き残ってきた。いわゆる文明化は、サーフィンに対してもってきた意味に関して、サーフィンの精神的な次元を減退させ、物質文化の中で絶滅寸前に追い込んだ。しかし、1890年代の西洋社会の男性らしさを強調する文化にとって、サーフィンは中産階級社会の退屈を治療する手段となった (Crawford)。

サーフィンは様々な要素を含んでおり、そのなかでスポーツマンシップ、自然と戦う男らしさなどのイメージは、熱帯地のヴァカンスというイメージと重なり、アメリカ大陸に渡って、さまざまな人の注目を引いた。ハワイ諸島の観光開発によって、その当時から報道はサーフィンを取り上げてきた。有名な作家であるマーク・トゥエイン、ジャック・ロンドンはサーフィンについて記述していた。オアフ島のワイキキビーチは当時、海のアウトリガーカヌーとサーフィンを初めとした海のスポーツの中心となっていた。ここからサーフィンはスポーツとして再スタートしてカリフォルニアに渡ってきた。20世紀の初めにサーフィンは世界で知られるようになったが、サーフィンの普及のために多大な貢献をしたとしてもっとも知られているのはハワイアンのデューク・カハノモクであった。彼は当時、水泳の選手でオリンピックの優勝経験を持ち、水泳のテクニックのデモンストレーションのため世界中を回り、同時にサーフィンのデモンストレーションも行っていた。1915年に彼はオーストラリアで初めてサーフィンを披露した。波資源の豊富なカリフォルニアとオーストラリアでサーフィンはすぐ人気となり、そこからハワイ、カリフォルニア、オーストラリアという、主に3つの道筋で発展し続けた。

欧米文化の実用主義的アプローチによって、サーフボードのデザインは大きく変わった。サーフボードは伝統的にセコイア、ヴィリヴィリの木から作られ、フィンのないボードでありとても重く、扱いにくかった。自然とともに生きていて波乗りが生活の一部であった古代ハワイアンに

とってボードの保管、管理、あるいはボード操作の問題は存在しなかった。しかし、サーフィンをレクリエーションとして同化した欧米文明は、それを現存している社会構造に融合させなければいけなかった。サーフィンの復活が始まった当時、サーフクラブが設置され、ボードはそこで保管されながらメンバーに貸し出しされていたという形式だった。サーフィン文化は排他的、高級な様相をもっていた。そのためサーファー人口はあまり増えなかった。アメリカ本土で、素材とデザインに様々な改良が施され、ボードはより軽いバルサから作られるようになり、テール側で操作をしやすくするフィンが設置された。このような改良によってボードは使いやすくなりサーファーが増えてきた。しかし、サーフィン文化が、実際に世界的に広がったのは第二次世界大戦の後であった。

世界は激しい変化を受けたと共にサーフィンも大きく変わった。技術の進化によってサーフボードは化学フォーム（ウレタンフォームなど）とファイバーグラスから作られるようになって、より軽く、より操作しやすく、より扱いやすくなって世界中に人気を呼んだ。サーフィンは中間層の人たちにとって海辺のレクリエーション活動となって、世界にレクリエーション文化として広がった。サーフィンは、戦前ハワイからアメリカと同盟国の英連邦の国々を中心としてオーストラリア、ニュージーランド、南アフリカに渡り、戦後50-60年代にイギリス、イスラエル、フランス、ペルーで流行りはじめて、60年代後半から世界中に知られるようになった。サーフィンは、文化としてそれぞれの国で吸収され、変形した。たとえば、アメリカの本土でサーフボードのデザインは大きく変わり、よりアグレッシブ、より若者向きとなって、新しい波乗りスタイル、サーファーのライフスタイルが若者の一つのサブカルチャーの元になった。オーストラリアではサーフィンが流行する以前にライフセイバーのクラブが存在し、スポーツの領域を超えた政治的な権力も持っていた。そして、サーフィンが紹介されてから他のライフセイビング活動と一緒に積極的に受け入れられ、ハワイとカリフォルニア以外にスポーツ普及活動の中心となった。フランスの場合、特定の人々が直接にサーフィンを持ち込んだわけではなく、英連邦国で行われていた様々な国際イベントでサーフィンの情報を聞き、国内にサーフィンに必要な要素（人、波、ボード）があったため、フランス人が独自に発展させてサーフィン界に登場してきた。南米は生活格差が大きいため、サーフボードを手に入れられたのが中間層に限られ、サーフィンを楽しめたのは富裕な若者のみであった。そのために南米のサーファー、サーフィン文化は貴族色が強い(Booth 2001, p. 91)。

50年代において経済的、政治的、社会構造的な状況は、サーフィン文化の隆盛を可能にした。戦後の経済成功と消費者資本主義のブームは継続するスリルや楽しみを探し続ける世代を生み出してきた。しかし、50年代から70年代にかけて、サーフィンはサブカルチャー、アンダーグラウンド社会反抗カルチャーであり、経済成長に伴い進んだ消費文化に対して、人間性を象徴する自由精神そのものであった。そのころにサーフボードなどの道具は、サーファーたち自身がバックヤードなどで作り商品化はされていなかった。メディアの影響のおかげで増えていたサーファー人口

は業界の注目を浴びることとなった。サーフィンは、企業からビジネスチャンスとして捉えられ、その商品化が進み、70年代末期にサーフィン文化の一部はプロスポーツに転向し始めた。

日本における受容

日本のサーフィン文化の歴史はあまり古くない。ボードに立って波に乗ることは、サーフィンとしておそらく20世紀のはじめから広く知られていたが、海のレージャとして日本で初めて広がったのはおそらく第二次世界大戦の後のことであった。日本列島は海に囲まれて波に恵まれているので、戦後日本に駐留してサーフィンの経験をもっていたアメリカ軍の兵隊が、日本の波に気づいたのであろう。初めて日本に渡ったサーフボードはアメリカ兵によって持ち込まれた。鎌倉は、横須賀の米海軍基地から国道134号線で近いことから最初のサーフスポットとなり、1960年代から逗子、由比ヶ浜、七里ヶ浜、片瀬、茅ヶ崎あたりで同時に広がっていた (Okuda Surf Style)。日本サーフィン発祥の地は、神奈川県藤沢市鵠沼海岸、鎌倉市、千葉県鴨川市、岬町太東ビーチと言われており、日本に初めて持ち込んだのは俳優・歌手の「若大将」こと、加山雄三とされているが、おそらくサーフィンは同時期に数箇所です数人によって始められていたので、一箇所を特定するのは不可能である。

しかし、1966年7月には、第1回全日本サーフィン大会が千葉県鴨川市で開催された。70年代の初めに、足立区の東京サマーランドの波の出るプールで、スティーブ・ペリンというサーファーが、波乗りを披露した。当時の雑誌『SURFER』に8ページ分の写真と記事が残されている (Okuda Surf Style)。東北を代表する宮城県、仙台新港ポイントでの波乗りは1968年ころに始まった。サーフィンは日本列島で一度紹介されてから数年の間に全国に広がった。しかし、日本で波を楽しむ文化はサーフィン以前にあって、洗濯板やフロートで波乗りをした日本人がいたという証言が残されている (Okuda Surf Style)。

世界のサーフィン文化と同様に日本のサーフィン文化の商業化は70年代から始まった。それまでに世界の過程と同じように日本のサーフィン文化はアンダーグラウンド文化であった。戦後経済成長に伴う高度産業社会からの逃避を試みた一部の若者は、自由を求めて、ドラッグ、宗教、精神世界といったいままでとは異なる価値観を基準にしはじめた (矢口, 2007)。¹ '67年にベトナム反戦運動から派生したヒッピー思想が生まれ、各地でロックフェスティバルが催され、コミュニケーションが生まれ始めた。サーフィン文化とヒッピー運動が重なり合ってカウンターカルチャーとして開花した (Takashi et al., 2007)。

80年代に日本の経済成長に伴って贅沢な生活を手に入れた若者は、様々なカウンターカルチャーのグループ、「族」に集まり始めた。サーフィンは「トロピカルヴァカンス」、「究極の遊び」、「海添いの生活」というイメージを持つと同時に自由を基準にしているため、サーフィン文化はカウンターカルチャーを好む習性がある。そのため多くの若者はサーファースタイルにあこがれて

きた。80年代にサーファースタイルはとても人気があった(Sato, 1991, 100)。しかし、多くの若者は実際にサーフィンにかかわりなく、泳ぎさえもできず、サーファースタイルを主にファッションで表現し、暴走より安全な海岸での娯楽に走った(Sato, 1991, 165)。80年代に多くの暴走族は強化された法律のため危険度のより低い行動に走った。暴走族や、ヤンキーの一つの選択肢はサーファースタイルだった(Sato, 1991, p.100)。佐藤(1991)は80年代の若者の文化について、主に肉体労働の若者の文化である暴走族、ヤンキーなどに対して、サーフィンは日本の大学生や専門職の若者、頭脳労働の若者の文化であり、グループとグループの間に摩擦が起きていたと記述している。おそらくこの時期に、日本ではサーフィンに対して社会的にネガティブなイメージが固まり、サーフィン文化は、暴走族、ヤンキーなどと同じく、若者の常軌を逸したサブカルチャーとして見られるようになっていた。この貼り付けられたイメージは強固で、今もサーファーの社会活動に対して、ある程度のハードルになっているのではないかと考えられる。

90年代からは、メディアのおかげでサーフィンは主流スポーツになっていないにもかかわらず、主流ポップカルチャーになってしまった。現在、社会でその要素は音楽、写真、美術、ファッション、言語、ライフスタイルなどで観察できる。この意味で、サーフィン文化或いはビーチカルチャーが成立していて、社会の中で経済的、文化的な価値をもっているといえる。

現代のサーフィン文化

どんな文化でも人の体はとても大きなシンボルである。体はパワー、ステータス、象徴価値を持ち、それらが合わさって身体資産とされている。特に、ビーチと関連している文化の中で自分の体を人目にさらすということで体が大きな役割を果たしている。身体資産の価値はこの資産を違う形、たとえば周囲の好評、人気など、社会資産、或いは経済資産に移動させる能力に基づいている(Booth, 2001)。進んでいるサーフィンの商品化とプロツアーの発展によって、サーフィンを通じた社会資産や経済資産に代わる身体資産は、より多くの人にとって魅力を持って人を引き付ける。このことは、サーフィンが主流スポーツではないのに、その人口と経済的な影響が増えているというプロセスを裏付ける。現在サーフィンは海岸線のあるほとんどの国に普及し、現在サーフ人口は世界で2千万人を超过している(Kampion, 2003)。

元ポリネシア文化の一部がレクリエーション活動として世界中に広がり、各地で既存文化と融合して、行為自体が変わらなくてもそれぞれの形、あるいはスタイルに分岐した。ハワイは文化の発祥地として、サーフィン人口の構成が変わっても、波とサーファーが調和している単一体という古代の考え方は、今でも強調されている。一方、カリフォルニアでは波乗りが、古代スポーツ、闘牛、スキー、セーリングのミックスとなり、カリフォルニアのサーファーは波を自己表現のキャンバスとしてみている。ポリネシアの実践文化は、ユニークな方法でこのようなカリフォルニアの文化に変容した(Crawford)。

オーストラリアのサーファーは、カリフォルニアスタイルを受け継いできた(Booth, 2001)。オーストラリアでのサーフィンは、政治的、社会的な勢力を持っていたライフセイバー団体活動のひとつとして始まった。しかし、自由を基礎とするサーファーと、勢力を維持しようとするセイバー団体は、行き違いを生じ、サーフィンはまったく別な文化に変身した(Booth, 2001, p. 100)。オーストラリアでサーフィンは国技であり、オーストラリアのサーファーが装備のデザイン、波乗りスタイルなどに様々な改良を導入し、競争心を強めてスポーツとして成立させてきた。現在プロツアーの中で、ハワイアの次に一番多いサーファーはオーストラリア人で、2007年の世界チャンピオンになったのはオーストラリアのミック・ファニングである。

私のインタビューの中で日本のサーフィン文化の特徴について聞かれたとき、一番取り上げられたのは海外のメディアとブランドの強い影響力であった。ルース・ベネディクトによると日本は一神論的な宗教のモラルの極端さがないため、社会のすべて、論理からライフゴールまでは状況に左右される。だから人は抵抗なく考え方を変えることができ、新しいことはすぐに流行となる可能性が高い。

次の特徴は、サーフィンが個人的な体験で、個性を表現することから始まるが、日本の社会の道徳原理では、恩あるいは義務、義理の遂行に基づいている。個人の欲求を満たす、個人主義は悪と見られ、身体的な楽しみ、快楽が重要だが、適切な位置づけがあり、仕事やまじめな行動に邪魔してはいけないという意識がある(Ruth, 2005, pp. 177-178)。従って、直接の社会貢献が見られないサーフィン文化は、常軌を逸した遊びと考えられている。日本人は楽しいという感覚の発達に努めるものの、設定されている社会の道徳原理によってそれを犠牲にし、自分たちの感情生活を複雑にしている。

もう一つの特徴は、日本の社会が様々なレベルで順位、順番を持ち、外からどのように見られているか、評価されているかに基づいていることである。このような合理的な考え方は、サーフィンにおいて非常にテクニカルな姿勢を生み出してきた。海外と日本のサーフィンメディアを比べると、海外のメディアが、サーフィンを個人体験、自由な表現として強調しているのに対して、日本メディアの報道の大部分は、技の理論的な記述に割り当てられていることが目立つ。日本のサーフィンスタイルはあまりにも細かく技術的に区別されているため、世界でレベルの高い、個性を持った、美しいサーファースタイルは一番評価を受けるが、かえって日本ではマニュアル的なアプローチが流行するのである。

サーフィン文化は歴史を持ち、象徴的な要素、ルーズなライバル階層、ユニークなライフスタイルの特徴をもっている。サーフィン文化の一部分は、現代でも、高潔で、積極的、精神的な意味で満たされている行為として、ポリネシア文化の基礎的、徹底的な価値を表現している。

サーフィン文化と社会

サーフィンを社会における文化としての貢献、役割、容量の観点から評価するのは非常にむずかしい。しかし、崩れやすい自然環境を持つ海岸線地域で進んでいる開発、人口増加、工業化などの中で、海岸をとりまく一つの地域社会として、サーファー社会は注目を浴び始めている。

一般的にサーフィン文化と結びついている社会問題は、ローカリズム（地方主義）と反社会行為（麻薬中毒、飲酒、盗難、暴行）。しかし、反社会行為問題は直接にサーフィンに関係なく、現地の社会的、経済的な状況が裏付けられ、サーフィン文化との関連性がない（Hull, 1976）。

サーファー社会の一つの大きな問題はローカリズムである。サーファー人口が増えているため、浜や波に人工的なプレッシャーがかかり、自然なリズムの中に不自然なルールが持ち込まれ、海の中で乱暴なトライブルールや、波の所有権の主張が適用されている。このスケールは地域によって異なるが、主なメディアや行政機関、強制機関の注目を受けるほどのケースもある（Blood on the waves as 'Surf Rage' rices）。ローカリズムは、正式にルールが存在しないところで優先順位の規定を、正しいとして強引に持ちいれる。人類学的に、ローカリズムは一族の自己維持のための領域防衛対策と考えられている。サーフィンにおいてローカリズムの機能は、サーフスポットに直接関連していないサーファーを除外することである。これは暴力、敵意を生み出すため取り締まり、規律、権威主義につながる可能性などが考えられる。サーフィンは、法律に影響されていない残り少ない活動であるが、将来自由なサーフィンは免許、保険、などの形で法律によって規制される可能性がある（Scott）。

ローカリズムの積極的な点もある。サーファーがサーフィンを通して直接に直面している問題は、混雑、環境汚染、海岸線の開発である（Hull, 1976）。ローカル（現地のサーファー）は自分の生活環境を存続させるためにこの環境との関係を認識し、環境を管理しなければならない状況から、環境に対して責任感が生まれる。この考え方、あるいは責任感が生まれるプロセスは、原住民の考え方に非常に似通っている。この意味でローカリズムの可能性は非常に高い。現代、有名な、質のいいサーフポイントは、その社会的・経済的な価値が開発企画者によって高く評価されたことで、多くのスポットは海岸線開発によって破壊されてしまった（Scarfe et al., 2003）。現在、このような動きに対して、現地のサーファー社会は海岸線環境保護活動の大きな力になるだろう。

サーフィンは地域社会を活性化させる能力をもっている（Lazarov）。サーフィン文化を発生させるために必要な5つの要素が波、気候（特に水温）、海岸線への公共アクセス、地域の文化背景、経済能力、社会の受け入れ態勢などである（Hull）。そのなかでサーファーにとってサーフィンの質を測る基準は、波の質、波の頻度（天候、サーフスポットの数）、サーフの安全（海水の水質、サーフコンディション、治安状況など）である。このサーフィンの質を変えるのは教育、文化、法律である（Lazarov）。サーフィンは地域社会にとっても大きな価値を持ち、サーフィンの心地よ

さを左右する要素は、地域のサーフ人口、訪問者、サーフィン関連企業、地域経済に重大な結果をもたらす (Lazarov)。サーファーは様々な形で環境保護運動に取り組んでいるが、根本的な問題はサーフィンをしている人が社会的、経済的に同じ階層ではないことである。サーフィンは非常に個人的な体験で空間的、時間的な自由を求められているため、行政側と交渉できるために必要とされる代表組織がまとまりにくい。それから、行政との対話でサーフィンの心地よさの維持と改善を主張するために、経済的、社会福祉的な明確な積極的な根拠を提示できていない (Lazarov, 岡本, 2005)。

日本の場合、海岸線の全長はおよそ 35,000 km で、海岸地域で都市の密度が 32% に関わらずに人口の 46%、工業運送の 47%、営業の 77% が海岸地域に密集している (Isobe)。海岸線にもっとも大きなダメージをもたらしたのは自然の原因ではなく人間活動により進む侵食である。これは特に第二次世界大戦後の日本の急激な工業化とつながっている。自然災害や、人工活動によって加えられた被害を食い止めるために日本では 60 年代から海岸線強化建設が始まり、現在に至って海岸の 80% は守られている。言い方を換えれば海岸の 80% は自然の環境ではなく人工の環境となっている (Isobe)。日本では高潮、高波、津波と共に海岸線の開発によって環境の再生能力が低下し環境破壊問題が目立ち始めてきた。直線の海岸線を持つ浜は、好ましいサーフスポットを生み出さない。多くのサーフスポットは、複雑な地形を生み出す場所、たとえば河口、珊瑚、岬、岩、埠頭、防波堤などの近くに存在している (Scarfe et al., 2003)。日本の海岸線の 80% が加工されているということは、ほとんどのサーフポイントが人工地形のところに存在することを意味している。開発が進むことによって、数少ない自然のポイントだけではなく人工的に作られた波も危険にさらされている。海岸線開発は環境に与える影響を把握できずに進んでいる。それは環境問題を無視しているという意味ではなく、環境についての知識が足りないということの意味している。ここで環境というのは自然だけではなく、地域社会、文化を意味している。海岸線環境、社会、サーフィン文化を科学的に研究することによって、海岸線環境を保護するべきである。

サーフィンの心理的な動機

サーフィンはサーフボードを使って波を捕捉し、波をすべるという物理的な行動である。この行動とその背景 (ファッションスタイル、言語、音楽、ライフスタイルなど) は目に見えるもので、私たちは文化として認識しているが、サーファー社会、サーフィン文化を世界的に統一させているのは観察可能な行動やその背景ではなく、人は波に乗るときに感じる感性的なことである。この感性的な体験は背景文化に左右されることなく心の中で人間性の核心にアピールしている。感性的な満足感はサーファーの心理的なのめりこみを説明できる。

シェパード (Shepard, 1982) によると、我々の社会は狂気に満ち、自己破産を続けているとされる。地球上の生物の種類のかなで自分の生息環境を破壊する生き物は人間しかいない。シェパー

ドは、現在社会をこどもの成長とたとえると、我々は幼時段階でとどまっています、その破壊行為は幼時のときに通常みられる無意識的な恐怖、ファンタジー、不安の結果として説明する。原住民の社会では、自分たちの世界の中での位置を理解し、自分たちを世界の主人としてではなくお客として捉えている。このような成長段階は円熟といえ、ノーマルと見るべきであり、この状態は我々の社会にはない基準である。この基準の意味は、日常生活が命の精神的重要性から切り離されていない。個人の成長はグループの仲間にとって、全体の創世の一部と見なされているというものである (Shepard, 1982)。そのときに自然は成長の大きな一部であり、母親のおなかにいるのと同じように外の自然を自身の一部として統合する。

私の今までのシベリア原住民の調査で、原住民は、生命資源を与えてくれる土地や海を「聖なる母」と言及することで自分たちの住んでいる土地や海と精神的な関係を訴えていた。サーフィン文化でも、音楽、文書、芸術を通じて海は「聖なる母」と呼ばれている。現在のサーファーの生活は直接に海の資源と関わっていないが、このような発言は海が自分の生活の中である部分を占めていて、本人にとって必要なものだということを意味している。インタビューの中でほとんどのサーファーは、サーフィンの魅力について「自然との触れ合いは気持ちがいい」と答えた。そのときに「海を見ているだけでエネルギーを感じて充電する」と答える人も多かった。このように、サーファーは様々な表現で自然のエネルギーについて言及している。サーフィンをする場所の選択について、波の質、アクセスの便利さ、場所整備などのほかに、選択根拠として「雰囲気」、「オーラ」、「エネルギー」が取り上げられている。「都会の忙しさ、人の多さから開放され、癒される」という答えもよく聞かれる。東京都内とその近郊に住んでいるサーファーは、この理由を特によく挙げている。多くのサーファーは波のないときでも、海が荒れてサーフィンができないときでも海にくる。「今日はサーフィンできないのにどうして海にきたの」と聞かれると、「海を見に来た」、「波がなくても海に入るだけでもいい」と説明する。ある男性サーファーは「波に乗ったときの快感は、私を善人にする。この気持ちは日常生活の中で私をより積極的に社会の中で役に立つものにする」と答えた。実際に、科学的方法でこのような発言を裏付けることは困難だが、この行動を観察すると、直接に自然と触れ合うサーファーの間には無意識、暗黙、感情的なレベルで自然に対する精神的なつながりの意識や、引かれる意識があると言える。

生態心理学の創立者であり、アメリカの歴史学者ロスザック (Roszak, 2001) は、人間の心の核心が生態無意識を持ち、産業社会の中で、生態無意識の抑圧は共同狂気の原因となると考えている。我々の現代社会の課題は、心理的、精神的な部分と生態的な部分の間に橋をかけ、地球全体と個人のニーズを連続体にさせることである。様々なセラピーは人と人、人と家族、人と社会の関係を探るが人と生態環境との関係をより重視するべきである。個人の幸福と地球の幸福のあいだに共同作用が存在し、地球のニーズは人のニーズ、人の権利は地球の権利である。この視点から見れば、心で生態環境を感じる自然体験は人間の当然の動機である。サーファーはサーフィンで自然と親密な関係を分け合っていて、それは極端な喜びと幸福感を生み出す。戦争中に活躍

したサーファー、トム・ブレイクは、自然を神と同一視し、波を「精神的」や、「聖なる」力として定義した。彼は、波乗りの幸福感が短時間にライダーと神に与えられたエネルギーとの統一から生まれると信じていた。このエネルギーの元は、神聖であるか、地球の動き、潮、月の動き、風のようなものかに関わらず波と合一する感覚は、オルガスム的な体験である。大きい波に乗るときに、或いは、チューブの中に入るときに恐怖と快感が併合し、波乗りの危険感覚と狂喜は統一する (Booth, 2001, p. 84)。

私のインタビューのなかで多くのサーファーはサーフィンの経験について聞かれるときに言葉で伝えられない自由感、興奮、生甲斐を報告していた。その時に感じたことを再び体験するために波乗りを繰り返す。この瞬間の感情について科学的な研究はされていないが、この感性の引力は文化、時代、国境を貫くサーフィンの魅力の原因となっているのではないかと考えられる。サーファー自身として、この感覚について精神的な体験だと報告するコトラー (Kotler, 2006, pp. 212-214) は、そのプロセスについて次のように書いている。波乗りは、いわゆる精神的な体験を経験させる二つの段階のプロセス、つまり、波をキャッチすることと、波に乗ることからなっている。波をキャッチすることは、特に波の大きいときに、ビルの屋上から飛び落ちることにたとえられる。その時点でアドレナリンラッシュはピークに近づく。波は崩れる寸前にテイクオフしなければならない。その一瞬に波のパワーはいちばん大きく、サーファーの無力がピークに達している。サーフィンでは防具がなく、サーフィンは個人的な行動で、海という敵意ある環境の中にいること、そして同じ波が存在しないため非常に不安定、不定期的、常に変化する、不安な、無感情な環境の中にいること、これら全てが人の感覚を鋭くさせ精神的な体験をさせる状況を作り出す。しかし、第二のステップで波に乗るということは、ピンポイントの集中が要求されている。瞑想と同じように高い集中は精神的な体験に導くことが知られている。もちろん他のスポーツでも高い集中力は求められているがサーフィンの場合では他のスポーツと違って人は常に変化している環境の中に置かれていて、行動参加条件の選択は、瞬時に高アドレナリンラッシュ状態から座禅の集中状態に切り替えるか、波の上から下に落ちるかしかない。このような状態は、人の意識を予想できない方向にねじ曲げると考えられる。

ダイナミックな活動に関わっている人の活動を通して得られる快感を記述するためには、アメリカの心理学者 Csikszentmihalyi と人類学者佐藤郁哉は (1991) フローのコンセプトを適用している。ダイナミックな、リスクを伴う活動に関わる人は、この活動に関して完全な掛かり合いを感じる心の状態である。「どうしてサーフィンを続けているの?」という質問に対して「楽しいからやりつづけている」という答えが一番多かった。この場合、「楽しい」という状態を一番説明できるのは「フロー」のコンセプトではないかと思われる。しかし、前述されているサーフィンの危険性や困苦を考慮すれば、「楽しいから」という意味をただ体感的に快感があるというように考えるのは難しい。

佐藤郁哉と Csikszentmihalyi による、「フロー」の状態はいくつの特徴を持つ、その中で行動

と自覚の合併, 限られたフィールドで意識の集中, エゴの喪失, 自己適性とコントロール感覚, 明確な目的, 行動自体が楽しいという意識が特徴として挙げられている。

波のパワーは天候によって非常に異なるが, 普段海が荒れた時, 台風が接近したときなどには, 波を見ただけで危険を感じて海に入ろうとは思わない。しかし, サーフィン能力がある程度に達すると色々な波にチャレンジしたくなる。サーフィン能力というのは波に乗る技術だけではなく, 体力, 精神力, 天候と海の知識, 自信などを意味している。しかし, 波が大きくなると様々な危険が増え, 場所によって命に危険はないものの, 大怪我の危険性が増えてくる。波がある大きさを超えると生命の危険もある。それでも大波にチャレンジするサーファーがいる。このタイプのサーファーは波に乗るスリルを味わうために海の危険な状態を無視することなく, その危険性を波乗りする楽しさの一部として受け入れている。このレベルでは海の中の行動と知覚(自信, サーフィン能力, 危険性自覚)が一致一つの体験となる。

波のサイズがあがると波を捕まえるために一番重要なのはタイミングと波に対しての位置である。不規則に来る波と望んだスピードで自由に動けない液体環境という二つの条件のなかでタイミングと位置を測るために高い集中力が必要となる。多くのサーファーは, 波を捕らえるためパドリングを始めるとき, 周りに気づかない。私の経験では, 波に立つ位置にいるサーファーの1mぐらいの距離にいてもまったく気づかないというのが観察できた。そういう時は, 波に集中しているために視界も狭くなっていると考えられる。

インタビューの中で私の質問の「どうしてサーフィンが好きですか?」に対して, 「そのときに自由を感じるから」という答えが多かった。サーフンはとても個人的な経験で, 周りに人がいても, 波のエネルギーを感じるそのときの体験を同時に他の人と分かち合っていない。この体験はとても個人的なものである。水の中では水の物理的な法則に従っていて, 普段の日常生活で経験している陸上の生活の規制がない。大きくいえば社会的な, モラル的な規制もなく, 水面をすべるときに自由自在に自己の動きで表現できる。このとき, 本能を抑えるエゴが弱くなり開放感を味わうことができる。

サーフンは技術レベルの高い活動で, ある程度のレベルに達するまでにコントロール感覚を味わうことができない。ボードの上に立つときに技術が高ければ高いほどボードを細かく操作し, 波の表面で複雑な動きができる。しかし, 波をすべるために機能的な技は多くないにも関わらず, すべてのサーファーが常に機能的な役割をもたない演習にチャレンジし続けていることは, 水面の上でボードのコントロールを楽しんでいることを示している。

「サーフィンを始める」, 「サーフィンを続ける」, 「サーフィンを楽しむ」ということ背景には様々な原因と意味があるが, 行動の目的は単純明快で, すべるときに味わう快感とスリル感はこの行動の直接的なフィードバックである。

サーフンは行動自体が楽しい。プロサーフィンの組織や, 様々な大会などが存在するにも関わらず, 大部分のサーフ人口はサーフィンを通じて報酬を受けられない。サーファーは波乗りを

通じて純粋に身体的、精神的な快感を満たすために波乗りを楽しんでいる。

サーフィンの「フロー」状態では、行動の順が行動の内部の論理に従って流れ、行為者の意識的な介入が必要ないと感じられる。行為者は自然に活動が流れる中で自分の行動をコントロールできると感じ、自身と環境、時間の区別がつかなくなるという状態である。「フロー」状態は習慣性を持ち、「続けている理由」と聞かれたサーファーは「はまっちゃった」、「乗れるようになったら面白くなった」、「はまったらやめられなくなっちゃった」と答えて習慣性を示してきた。

波に乗るときに人の心と意識でおきているプロセスは研究されていないがこの精神的な部分はサーフィン文化の絶対的な核心であることに間違いない。

結 論

本書ではサーフィン文化を、単に一般的に思われているレクリエーション活動、スポーツとしてではなく、そのより深い意味と潜在能力をどのように研究するか考察して、今後の研究のための基盤を作ることを試みた。

サーフィンは、複雑な、多面的文化として歴史を持ち、その歴史が世界の政治的構造、社会的発展、経済的発展、技術進化、現地文化の発展に影響され、変化しながら存続してきた。

サーフィンはとても個人的な行動である一方、古代ポリネシア社会のように精神的、信仰的な意味を持つ場合から、現代のように、海岸部で大きな社会的、経済的影響を与えるような要素まで、非常に幅広く社会のなかで一定の価値と役割を持たされている。しかし、サーフィンは著しく個人体験的な行動であって、外部からの観察者には肉体的な係わり合いにしか見えないが、サーファーにとってはより感情的、精神的な結びつきがあり、サーフィンを通して得られる精神的な達成感は、サーファーにとって必要不可欠なものである。これは行動の観察と行動参加によって明らかに確認できるが科学的に記録、分析、解釈はまだされていない。

サーフィンは文化史を持ち、社会レベルと個人レベルで観察できる深い内容がある。そして、世界に広がって、それぞれの主流文化と混じりあってどのように変化したか、基礎要素で共通している。本書で示したようにサーフィン文化の研究は、我々がそもそも人間として共通する本質を理解するうえで必要だと考えられる。

このような観点から、サーフィン文化を、① 歴史(過去の変化と変化の要因)、② 社会的な役割(社会的な、経済的な影響力、可能性)、③ 心理的なニーズ(精神的、感情的、行動的)という三つの構成要素とその交互作用として総合的に分析するべきと思われる。このアプローチによって学際的な interdisciplinary 方法を用いて次の問題に照明をあてることができるであろう。つまり、① 発展しつづける技術と用具のデザインはどのようにサーフィン文化を変え、どのように地理的、人口的な分布に影響を与えたか；② サーフィンは原住民文化の一部としてどのように異文化と交じり合い、どの要素は存続しているか；③ サーフィン文化は主流となる文化からどのよ

うに受容され、沿岸地域社会にどのような影響をあたえているか；④ サーフィンの経済的、政治的可能性、海岸線環境保護における役割と可能性はどうか；⑤ 快感、幸福、充実感、精神的体験、熱中しすぎなどの感覚についての説明はどうなっているかなどである。

上述の問題の調査や研究結果は人類の様々な文化を理解するという理論的な意味のほかに実践レベルで教育と地域開発の分野で応用できると思われる。教育においては、サーフィンを通して自然とより深い関わりができるため、本書で示したように、その関連は自然環境に対しての関心を高め、自然に対して責任感が生まれると考えられる。他の野外教育活動とともに現代に必要とされている環境教育の強力な手段となる。地域開発に関しては、サーファー人口が現地の社会、環境に与える影響を計算できれば、今進められている海岸線開発に新しい方向性を提案できるであろう。海岸線環境は経済的な視点だけではなくレクリエーションの視点も視野にいれるべきである。サーフィンはレクリエーションの資源として経済的、社会的に非常に大きな潜在的可能性を持ち海沿いの町おこしのための資源、人をひきつけるための資源として考えられる。

スポーツ、ライフスタイル、音楽、芸術、思考をとおして世代から世代へと伝えられているサーフィンは、文化として成り立っている。しかし、直接的に社会や経済に貢献しているという明確な証拠がほとんどないため世界的に、特に日本の社会のなかで優先順位の低い遊びとして軽視されている。とはいうものの、産業化によって我々の生きている環境(自然環境と人間環境を含む)が破壊されている今、我々がレクリエーション文化に込められている心と再生能力を学ぶべき時代になっているのではないかと考えられる。

引用資料

単行書：

- Booth, Douglas. 2001. *Australian beach cultures : the history of sun, sand and surf*. Frank Cass, London.
- Finney, Ben and Houston, James D. 1996. *Surfing : a history of the ancient Hawaiian sport*. Pomegranate Artbooks. San Francisco
- Kampion, Drew. 2003. *Stoked : a history of surf culture*. Gibbs Smith. Layton, Utah
- Steven, Kotler. 2006. *West of Jesus : surfing, science and the origins of belief*. Bloomsbury publishing, NY
- Theodore, Roszak. 2001. *The voice of the earth, an exploration of Ecopsychology*. Phanes press, MI
- Benedict, Ruth. 2005. *The chrysanthemum and the Sword. Patterns of Japanese culture*. A Mariner Book, Boston
- Sato, Ikuya. 1991. *Kamikaze biker : parody and anomy in affluent Japan*. The University of Chicago Press, Chicago
- Shepard, Paul. 1982. *Nature and madness*. The University of Georgia Press, Athens, Georgia.

雑誌論文：

- Takashi Tomita, Emiko Cohen, Tadashi Yaguchi. 2007. 「The surf History, サーフィン 50 年

史, Hawaii, California, Australia, Others], Blue, vol. 6, pp. 50-60
矢口唯史, 2007, 「自由と求めた2つの道, その接点」, Blue, vol. 6, pp. 60-63

インターネット:

- 岡本英樹, 2005, 「原町市サーフツーリズム推進のための短期的施策について~2004年全日本サーフィン選手権大会アンケート調査および事業者ヒアリング調査結果からみたミスマッチとその解消策~」, 原町市サーフツーリズム推進計画報告書, Retrieved 2007.9.22, from <http://www.city.minamisoma.lg.jp/etc/haramachi/shoukou-ssh/surfing/pdf/surf-plan.pdf>
- Butts, Steven L., 《Good to the last Drop》: *Understanding surfers' motivations*. Retrieved 2007.07.10, from <http://physed.otago.ac.nz/sosol/v4ilbutt.htm>, Sociology of Sports Online.
- Blood on the waves as 'Surf Rage' rises*, retrieved 2007.10.01, from <http://archives.cnn.com/2000/books/news/11/27/australia.surfing.reut/>, CNN.com.book news
- Crawford, Carin, *Waves of Transformation*, Retrieved 2007.07.10, from <http://www.lajollasurf.org/wavesof.html>, La Jolla surfing
- Hull, Stephen Wayne. 1976, *A sociological study of the surfing subculture in the Santa Cruz area. A thesis presented to the Faculty of the Department of Sociology San Jose State University in partial Fulfillment of the Requirements for the Degree Master of Arts*. Retrieved 2007.07.10, from http://www.lajollasurf.org/srf_thes.html, La Jolla surfing
- Lazarow, Neil. 2007. *The value of coastal recreational resources*. Retrieved 2007.05.25, from <http://www.coastalwatch.com/news/news.aspx?newsId=239&newsType=admin>, Coastal watch.
- Lazarow, Neil. 2007. *What is a Surfing Reserve and why should surfers care about them?* Retrieved 2007.10.04, from <http://www.coastalwatch.com/news/article.aspx?articleId=309&cateId=3>, Coastal Watch
- Masahiko, Isobe. *A Theory of Integrated Coastal Zone Management in Japan. Energy, Security and Environment of Northeast Asia, Center for Global Communications*. Retrieved 2007.05.25, from <http://www.glocom.ac.jp/eco/esena/resource/isobe/index.e.html>
- Scarfe B.E., Elwany M.H.S., Mead S.T. and Black K.P. 2003. *The Science of Surfing Waves and Surfing Breaks—A Review. Integrative Oceanography Division eScholarship Repository, abstract*. Retrieved 2007.7.11, from <http://72.14.235.104/search?q=cache:l0f1RF4iUBkJ:repositories.cdlib.org/cgi/viewcontent.cgi%3Farticle%3D1056%26context%3Dsio+The+Science+of+Surfing+Waves+and+Surfing+Breaks&hl=ja&ct=clnk&cd=2&gl=jp>
- Scott, Paul. 《We shall Fight on the Seas and the Oceans... We shall》, retrieved 27.07.2007, from <http://journal.media-culture.org.au/0302/05-weshallfight.php>, M/C: A Journal of Media and Culture 6.1 (2003).
- Surf culture*, retrieved 2007.10.01, from <http://www.padobo.com/culture/index.html>, Okuda Style Surfing.